

若手研究会等 「分子科学夏の学校の 講義内容検討会」 報告

武田 朗宏

東京工業大学・資源化学研究所・博士課程3年

(所内対応) 菱川 明栄

分子科学夏の学校は分子研レターズ57号の17ページにも触れられているように1961年から毎年、若手研究者（特に大学院生）が主体的に分子科学を学ぶ場として運営されてきた。参加者は分子科学若手の会メンバーということになっているので、特定の団体があるかのように誤解を受けることもあるが、主にその年の夏の学校に自由意志で参加する人たちが若手の会を形成している。

分子研には陰に陽に夏の学校に対する援助を受けてきたが、平成20年度から「若手研究会等」という新たな共同研究プログラムで大学院生が代表者として研究会の開催や夏の学校等の準備会の開催の申請ができるようになった

ため、早速、申請書を作成、提出し、審査を受けた。分子研側で対応していただいた菱川先生からは、不採択の可能性もあるので申請内容をしっかり煮詰めたものにするよとの指導を受けた。責任重大ではあったが、採

択され、実のところ、ほっとした。

さて、実際、「若手研究会等」で何をしたかという、夏の学校を8月9日～5日間、で開催する準備として、講師の方々や世話役の担当研究室担当者が6月23日に分子研に集まって、各テーマに関わる学生が自らの研究の成果を発表し、学生自身の問題意識を高めながら講師の指導を受けた。また、これらをもとに各講師が夏の学校での講義内容テキスト作成の詳細を打ち合わせた。その結果、甲賀 研一郎先生（第一分科会担当）には「液体の統計力学理論と分子シミュレーションの基礎と応用」、分子研出身の南部 伸孝先生（第二分科会担当）には「化学反応動力学—機能分子の解明とデザイナー」、総研大機能分子科学出身の高橋 聡先生（第三分科会担当）には「蛋白質分子科学：蛋



白質の折り畳み研究の発展」、鳥井 寿夫先生（第四分科会担当）には「古くて新しい原子物理学」、山本 雅博先生（第五分科会担当）には「界面の魅力を探る」を講義いただくことになった。

夏の学校当日には60名の参加者があり、日頃、学会以外では顔を合わせる機会のない人たちと交流しながら、自分の研究分野に留まらない広い知識と先端的な研究成果に触れることで良い“刺激”が得られた。今の時点で我々に実感はないが、先生方に聞くと、夏の学校での交流が将来、同じく分子科学を推進する研究者同士で強い絆を生むそうである。

なお、夏の学校は年度の前半とは言え、8月に開催するのが常なので、前年度の12月中旬の申請に間に合わすのは非常に大変である。〆切を夏の学校開催半年前の2月あたりに延ばしていただくか、講師などの詳細が固まった時点で随時に申請できるようにしていただけると大変ありがたい。また、博士前期課程・修士課程の院生が中心に準備することもあるため、若手研究会等の申請資格は博士後期課程に限っていないことを明記していただけただけ助かります。

今後も分子科学を志す若い世代の大学院生が毎年、分子科学夏の学校を組織して「若手研究会等」に申請していくと思いますので、引き続きご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

